

ISSN 2188-1243

オンラインジャーナル

# 総合人間学

第19巻 第2号

Online Journal of  
Synthetic Anthropology

Vol.19 No.2

2026年2月

総合人間学会



## 目 次

### [報告]

総合人間学会第 19 回研究大会報告.....	1
	総合人間学会事務局
里山フォーラム ―里山の未来を拓く― .....	5
	倉本 宣
あとがき .....	29
	宮盛 邦友



[報告：第19回研究大会]

# 総合人間学会 第19回研究大会報告

総合人間学会事務局

総合人間学会第19回研究大会は2025年5月31日、6月1日に明治大学で開催された。「人と自然の未来—里山からの展望、失意と希望の30年をこえて—」をテーマとして大会シンポジウムが企画され、それとの関連もあり、初日は明治大学生田キャンパスで若手シンポジウム、総会、シンポジウムを行い、第二日は明治大学黒川農場で一般研究発表、黒川自然生態園観察、里山フォーラムを行った。

大会シンポジウムの企画主旨、プログラムおよび概要はすでにニュースレター No.32でお知らせした。以下では、ニュースレター No.33と重複するが、大会シンポジウム、里山フォーラム、若手シンポジウムについて概要を報告をする。

なお、里山フォーラムについては本号で詳細な報告を行うが、大会シンポジウムと若手シンポジウムについては発表者による論文を別途公表する予定である。

## 大会シンポジウム

2025年5月31日に開催された大会シンポジウムは「人と自然の未来—里山からの展望、失意と希望の30年を超えて」というタイトルで実施された。ここ数年のシンポジウムでは、はじめに基調講演もしくは特別講演が行われたのちにシンポジストが共通のテーマで報告する形式がとられてきたが、第19回大会では登壇者全員がフラットな立場で異なる視点から報告を行った。

報告題目と登壇者については以下の通りである。なお、司会は熊坂元大（桜美林大学、環境倫理学）と竹中信介氏（道徳科学研究所、比較文明学）が担当した。

報告1. 「環境の時代」とは何だったのか？—「生活」と「自治」への夢を振り返る

上柿 崇英（大阪公立大学現代システム科学研究科 准教授）

報告2. 風土化としての里山論と内在的価値の再評価

井上 浩朗（武蔵野大学 非常勤講師）

報告3. 里山問題を考える環境社会学の方法論—誰にとって何が問題なのか

松村 正治（NPO 法人よこはま里山研究所（NORA）理事長）

報告4. 日本の環境倫理学における里山論と、都市の里山について

吉永 明弘（法政大学人間環境学部人間環境学科 教授）

第1報告は、1960-70年代から現代にいたる環境思想と環境保護運動の流れを概観し、

現代社会の時代潮流の根底を問い直す報告だった。現代社会が人間と自然の関係について長期的な視点を欠いたまま技術開発による環境問題の解決を試みる方向へ流されていること、これは勝算が高いとは言えない賭けを行っていることになるのではないかという上柿氏の主張は、里山保全を含む環境保護活動の理念の大局的な反省を求めるものだった。

第 2 報告は、自然環境の内在的価値という環境倫理学の古典的テーマを改めて検討し、価値や権利を客観的なものとして拡張してきた動物倫理学などに見られる潮流とは異なる、把握しきれないものとしての価値を環境に見出すことの重要性を提唱した。井上氏の議論は、第 1 報告で提示された長期的視点の欠如という問題に直接応答してはいないものの、そうした長期的視点にとって重要と思われる「把握できない」という自然に対する謙虚さの重要性を提示することで、上柿氏の問題提起への部分的応答だと言えよう。

第 3 報告は思想系の学問とは異なる社会学の方法論を提示することを宣言し、上柿氏の報告に対して環境保全活動の低迷とは異なる里山保全の展開実践の様子を示した。里山保全活動は下火になっているという見方に対して、本報告では少なくとも一部の取り組みで参加者の広がりが見えることが説明され、大局的な困難とは別の視点から、現場実践からの模索の可能性が強調された。

第 4 報告では、里山概念を参照しつつ、原生自然に比べて一段低いものとみなされやすい「都市の自然」が論じられた。管理の行き届いた自然として郊外や農村の里山が連想されがちだが、板橋サンシティ団地のように都市内部にも生活と密着した形で豊かな自然が形成・維持されていることが紹介された。環境保全には長期的な視点が必要であることを認めつつも、里山概念の多様な在り方の発見や再解釈の重要性が指摘された。

人と自然の関係を問うというテーマは、地球温暖化や異常気象が続くなか、学術的にも社会的関心という面でも時宜を得たものであり、登壇者同士の議論が白熱したのみならず、質疑応答では対面・オンライン両方の参加者から多数の質問がよせられ、充実したシンポジウムとなった。登壇者の方々をはじめとする関係各位に心より御礼を申し上げる。

(熊坂 元大)

## 里山フォーラム

大会 2 日目の午後、明治大学黒川農場本館 2 階教室にて「里山の未来を拓く」という副題の下で里山フォーラムを開催した。首都圏における市民参加型の里山保全活動が開始されて、30 年あまりが経過し、活動のメンバーの減少と高齢化を憂う声もあるなかで、会場は「里山の未来を拓く」をテーマとしている。1 日目のシンポジウムと対照的に黒川農場周辺の多摩丘陵において現場の中心となって活動している話題提供者 6 人からの報告を得た。

コーディネーターの倉本からは、会場とした黒川農場の里山について、里山を雑木林と

いう生態系としてではなく、農地や草地や農家も含む景観（生態系の複合体という生態学的単位）としてとらえ、構造、機能、変化という視点を持つことで、里山の未来が拓ける可能性があることが提起された。

岩崎泰永さん（明治大学黒川農場教授）からは「黒川農場の里山教育」アグリサイエンス講座（里山講座）、大学院共通総合講座などの黒川農場の里山教育が紹介された。

小泉寛明さん（明治大学黒川農場技能職員、黒川農場の責任者）からは職務に即して「黒川農場の里山管理」が紹介され、ナラ枯れの発生が転機となったことが報告された。

吉武美保子さん（NPO 法人よこはま里山研究所理事、NPO 法人新治里山「わ」を広げる会事務局長）—— 話題提供者の中でもっとも活動歴の長い —— からは、フォーラムの対象とする地域を把握するために多摩・三浦丘陵群および神奈川県における里山保全活動の全体像が示された。多摩丘陵は良くも悪くも人口が多いことに特徴が認められる。

山田晋さん（東京農業大学、歴環研究者連絡会）からは「図師小野路歴史環境保全地域における里山管理と研究活動」として東京都でもっともすばらしい里山と言われる図師小野路歴史環境保全地域において、研究者間の調整および東京都環境局と元地主の町田歴環管理組合の科学的な支援を行ってきた歴環研究者連絡会の活動が紹介された。

小林健人さん（NPO 法人フュージョン長池公園、長池公園園長）からは「長池公園と里山保全活動」として、さまざまな市民が地域の活動として里山にかかわるために行っている活動がいきいきとしたスライドによって示された。

田村薫さん（多摩グリーンボランティア森木会会長）からは「多摩グリーンボランティア森木会の紹介」として、多摩市における里山保全活動が形成している森木会というネットワークの活動を紹介してもらった。ボランティアとして活動している田村さん自身が身をもって活動の高齢化を否定していた。

報告後に質問カードを利用して質疑は活発に行われたものの、制度や技術についての質問が多い傾向が認められた。そのため、前日のシンポジストの松村正治さん（NPO 法人よこはま里山研究所理事長）が主催して、「里山フォーラムではいい足りなかった」と言うことから、吉武さん、小林さん、田村さんたちの「夜会」と題したフォーラムが直後に開催された。里山フォーラムは吉武、小林、田村の 3 名の里山コーディネーターと山田、岩崎、小泉の 3 名の里山にかかわる大学関係者の話題提供によって成り立っており、意識したわけではないものの総合的な構成になっていた。里山の市民活動としての側面と科学としての側面に対応したものであり、今回は取り上げなかった文化としての側面も加えて、総合化の歩みを進めていきたい。（倉本 宣）

## 若手シンポジウム

本年度の若手ワークショップでは、「＜当事者＞の学びづらさを考える：かつてみんな子どもだった」という企画を実施した。

研究報告者は、長井岳氏（当事者研究）、藤阪希海氏（教育社会学）、江頭早紀氏（教育社会学・福祉社会学）、特定質問者として桂悠介氏、コメンテーターとして朝倉景樹氏にご登壇いただいた。趣意報告・司会は佐藤竜人氏が担った。今年も複数回の準備会を重ねたうえで、若手の斬新な研究をワークショップに昇華することができた。

本企画では、学校等の教育システムを生きてきた研究者が、自ら経験した暴力や挫折などの生きづらさを、オートエスノグラフィー手法から繰り返し捉え直し、「学び」をめぐる「教師と生徒」「友人」等の関係を考察した。自分研究ともいわれるオートエスノグラフィーは、従来の社会科学研究で十分に取り組みれなかった手法と思うが、本企画を通して、「人間がどのように学び、いかに生きるのか」を生々しく問う、経験的研究の新たな可能性が共有されたと思われる。

（本多 俊貴）

[報告：シンポジウム]

# 里山フォーラム

## ——里山の未来を拓く——

倉本 宣

**概要：**第19回大会2日目の「里山フォーラム」は明治大学黒川農場を会場に開催された。主に公的な目的で利用されている多摩丘陵北部の里山に焦点を当て、これらの現場で保全や解説に携わるコーディネーターたちによる報告が共有された。コーディネーターの小林、田村、山田、そして小泉は若い世代に属しており、今後も長年にわたって里山のコーディネーターを務め続けることが期待される。吉武、岩崎、倉本は次の世代へバトンを渡すことを意識し始めた世代である。発表者たちに共通して見られたのは、多摩丘陵の里山に対する深い愛着と、活動における積極的で創意に富んだ取り組みであった。里山の将来を憂慮する声がある一方で、このようなコーディネーターたちの存在は多摩丘陵北部の里山の将来に明るい展望を示している。

**キーワード：**里山の保全活動、里山教育、多摩丘陵、里山の未来

## はじめに

里山ボランティアは、高齢化と人数の減少にあえいでいると言われる。この大会の打ち合わせに参加したときにも、大会のテーマや1日目のシンポジウムは里山に明るい未来を描いているとは言えないものであった。そのような背景の中で、里山の未来はそのまま拓けるものではないかもしれないが、潜在的には拓くことのできるものであると考えて、複数の活動の副題を「里山の未来を拓く」にしてきた。

このフォーラムでは、事例を黒川農場の位置する多摩丘陵の北部に絞って、若いコーディネーターが中心になっている新しい活動や大学農場が核になった新しい里山の教育・研究を紹介して、里山の未来を拓いていきたい。

## 1. フォーラムの趣旨

倉本 宣

2日目の会場となっている黒川農場と黒川駅から歩きながら説明した黒川上地区についてパワーポイントを使ってもう一度紹介したい。

これは黒川の神社の汁守神社である。対になった神社として、町田市側に飯守神社があり、大國魂神社の食べ物を司っていたと言われている。現在は神奈川県と東京都に分かれているものの、武蔵国の時代には大國魂神社の側に黒川が属していた。

次は古い地図と昨日のシンポジウムで話題になった「さつき」と「めい」である。1880

年頃のこの辺りは、雑木林と水田が卓越していた。1980 年になると、農場用地は重機の走行実験場になっていた。周囲の水田や雑木林は変わっていなかった。雑木林は現在のよ様に樹高が一様ではなくて、低いところや高いところがあって、主木を伐採して薪や炭に使っていた時代から時間が経っていないことを示している。1990 年になると雑木林の樹高は一様になってきて、現在になるとまったく一様になり、黒川農場も建設されている。

私は明治大学の前には東京都の公園の職員であった。東京都では国木田独歩による武蔵野の雑木林という言葉が有名であるために、かつては丘陵地の里山の保全は雑木林の保全を意味した。里山は雑木林だけではなく、水田、水田の脇の草原、小川、などの生態系が集まったものである。この里山を景観とする見方に立てば、生態系の配置という構造、隣の生態系同士、例えば小川から水田に水を配るという機能、いま見てきたような時代による変化や歴史や文化も里山という見方を含む。里山を景観としてみることで、かつて都庁で私たちが行っていた雑木林の機能にとどまらない、里山の計画や経営を扱うことができる。

今までに私たちが里山に間して行ってきたことを述べよう。コロナ禍の 2000 年から里山にかかわる zoom 連続講演会を毎月開催してきた。会場にも話題提供

してくださった方が大勢いるので、心からお礼申し上げる次第である。また、昨年度から大学院の Zoom の授業として、6 人のゲスト講師をお願いして、岩崎さんがコーディネーターとして「里山の未来を拓く」という授業を行っている。さらに「アグリサイエンス講座」という社会人講座の一部として「里山未来」という講座を昨年度に続いて開講する。毎月 1 回、里山の管理技術ではなく、計画や経営に重点を置いて講義と実習を行っている。農場では小泉さんを中心に雑木林の管理について画期的な手法を開発している。小泉さんを中心にナラ枯れで枯死した大木を少人数で伐採して搬出する技術は素晴らしいものである。

黒川農場は、里山に関わる職員の数はわずかであるものの、大学の責任として、少しだ



図 1: 黒川の土地利用変化  
(上 1880 年、下 1980 年)  
農研機構農業環境研究部門

け世の中を進めるために、小さいながらも里山のセンターとして機能していきたい。

## 2. 黒川農場の里山教育と里山管理

岩崎泰永・小泉寛明 (明治大学黒川農場)

**岩崎泰永** 皆さんこんにちは。黒川農場へようこそ。私は黒川農場の教員である。小泉さんなどに比べると、知識も技術もなく関わりも浅いものの、私自身が黒川と黒川農場を非常に気に入っている。簡単に私の方でやっていることを紹介し、その後は小泉さんから紹介してもらいたい。

### ◇ 類まれな立地条件

黒川農場では、農学部の1年生(4学で計約600人)を対象とした農場実習と、社会人を対象とした農業実習(サイエンス講座)を実施している。農場実習では、これまで全く農業と接点を持たなかった学生が多数を占めることから、播種(はしゅ)や移植、収穫などの作業体験を中心とし、これに衛生管理の基礎を学ぶ加工実習を組み合わせている。社会人講座では、野菜生産の基礎を学んだり、有機栽培や自然栽培を実践したりする講座を開いている。さらに学部生と大学院生が所属する二つの研究室(フィールド先端農学研究室、アグリサイエンス研究室)が設けられ、農場の立地や施設を生かした実験・研究に取り組んでいる。

とはいえ、黒川農場が類まれな立地条件にあることは、実は十分に認識されていない。農学部がある生田キャンパス(川崎市多摩区)から比較的近く、年間を通して実習ができるのは大きなメリットであるが、それ以上に特徴的なのは、都市農業が展開されている地域に存在すること、開所当初から維持・継続されて有機圃場や自然圃場を持つことと、里山を含む自然環境を持つことである。

### 黒川農場の立地条件 (フォーラムでの発表スライドより)

これは農場の紹介の記事で、真ん中に線が引いてある。多くの先生は「大学から近くて1年中農場実習ができる」というだけが売りだと思っているものの、実際にはそうではなく、いろいろな取り組みができること、実際にはそうではなく、都市農業が展開する地域にあること、有機栽培や自然栽培が継続されていること、里山を持つことこそが、この農場の売りであると書かれている。あまり認知されていないので、もう少し頑張りたい。ご覧になったように黒川農場は小さいものの非常にいろいろなものが詰まっている。非常に面白いところである。

倉本さんプロデュースで大学院の講義を行っている。ゲスト講師の中には山田さんもいて、非常に面白い内容である。大学院生だけの講義であるが、学部生にもぜひ聞かせたい内容がたくさん含まれている。今年と去年は大学院生向けに講義を行い、ゲスト講師のネットワークを作り、それを大学や社会に広げていきたいと考えている。

私自身が農場で行っている仕事を紹介する。親子を対象に、農場や里山の良いところを紹介している。親子を相手に農業や里山散策などを行っている。赤で囲って色を付けたところは子供たちの評価で、里山体験を2回行って、アンケートの結果(5点満点)は5.0と4.6で2回ともとても満足度が高かった。



図 2: 黒川農場近くの里山の風景と子供向けの説明資料

農場を上空から見るとこのように見え、非常にいい場所である。このあたりでは生産を行っている。私は子供たちや親子、あるいは有志の学生を連れて黒川の里山を歩いている。こちらは汁守神社から見渡した私の好きな黒川の風景である。散策路の入口には湿地があり、そこが水源となって小川が流れていく。歩きながら楽しむことができるのが、黒川農場の外回りの景色である。私は非常に気に入っていて、暑い時期は避けるものの、春や秋に何度か訪れる。誰かを道連れにして一緒に行くこともある。

これはドングリを題材にした子供向けの説明資料である。簡単な資料を作り、花や樹木の名前を付けると、子供たちも喜んでくれる。このような活動を農場として行っている。見渡しながらの子供向けの取り組みである。このような活動を農場として行っている。本筋はしっかり取り組んでいる小泉さんから話をしてもらいたい。

**小泉寛明** 僕は大学の職員で、普段は畑の管理を主にしている。明治大学には職員が約 600 人いるものの、その中で畑に関することを担当している技能職はたった 3 人しかいない。机の前で仕事をするということはなかなかできなくて、畑を駆け回っている。

僕の紹介ということでお話しする。2008 年から明治大学生田キャンパスに勤務し、2012 年から農場に関わり、2012 年には黒川農場も完成した。先ほどもお話しした通り、畑の管理を担当している。畑は学生の実習と社会人講座に使用していて、そこでできた生産物の販売も行っている。最近では年間 1000 万円くらい、昔は 2000 万円くらいの売上有る野菜の管理をしている。

今日は「里山フォーラム」なので、里山のことを話したい。他の皆さんはおそらく最近のことを話されると思うので、少し昔のことを思い出してみた。

今日午前中から来られた方、すなわち歩いて来られた方は、先ほどの岩崎さんの資料にあったように、汁守神社やセレスモスのあたりから田んぼのあいだの道路を通って来られたであろう。緑が豊かで、川崎市としては素敵なところである。そこに明治大学が農場を作ったときが、まさにこの里山ランドスケープに明治大学が参加した時ではないかと思われる。それは 2008 年だった。ちょうど僕も 2008 年に入り、2、3 年くらいドングリの育苗をしていた。その頃も「畑のスタッフ」と呼ばれて明治大学に来ていたが、あるとき先生に「小泉くん、君はどんぐりを育てられるか」と聞かれた。全然予想もしていなかったの

## 小泉氏と黒川農場の年表

小泉寛明	（明治大学農学部事務室技芸職員）
前職	農業（家業）、造園業（従業員）
2008年	生田キャンパス 農学部事務室嘱託職員 学生実習、市民講座（現黒川農場市民講座）、圃場管理、ドングリの育苗
2012年	黒川農場 現職 学生実習（農場実習）、市民講座（有機講座、里山講座）、農産物販売、圃場管理、里山管理
2018年	黒川農場でナラ枯れ（森の異変）に気づく
2020年頃より	チェンソーで農場内の伐採を始める 緑地区分の再検討など里山をリスタート
2024年	農場主催の社会人講座アグリサイエンス講座にて里山の講座“里山の未来を拓く”を開講

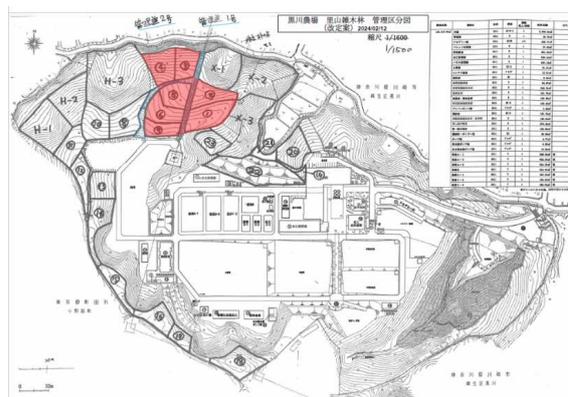


図3: 黒川農場里山管理区分図  
（赤：皆伐更新区）

で「食べるんですか」と聞いたけれども、どうやら違ったようだった。

2008年に黒川地域の住民に対して農場開発の住民説明会があった。その2年前から倉本さん率いる応用植物生態学研究室の活動の一環として「黒川谷戸プロジェクト」が繰り広げられた。放棄されていた水田を復活させたり、農場整備にあたって自然の調査をしたりしていた。この頃に、黒川の地域と明治大学の縁が始まったのではないかと考えられる。最初は農場として開設されたので、集められたのは畑を専門とする人たちであった。明治大学は制約が厳しい中で、畑に専念して、周りの里山のことは放置していた。倉本さんの方で自然を中心に活動を続けてきたので、今日があると考えている。大学として唯一行っていたのは、有機圃場で使う堆肥の原料となる落ち葉を収集していたことである。それは2012年から今日まで毎年続けているが、それ以外はほとんど何もしなかった。農場の人たちは、竹林のことなどについて一緒に考える機会はほとんどなく、むしろ里山で何かをしていると、怖い先輩に「何やってるの」と言われるような状況であった。

なぜ黒川農場で里山に関心が向かったのかということ、2018年頃から川崎市でも「ナラ枯れ」が始まった。農場の向かいの山を見ていたとき、夏なのに赤い葉が出始めていて、「何かおかしい」と気づいた。その時、2008年頃にドングリの育苗をしたことを思い出し、倉本さんと再び接点を持った。その結果、ナラ枯れだということになり、対策を考えるようになった。薬剤やラップなどの方法もあったが、やはり元に戻すのが一番だということになり、当時の管理を再現しようという方向に進んだ。ナラ枯れを契機に、大学農場として周りの人に伝えられることがあるのではないかと考えるようになり、倉本さんとも再び親しくなった。ナラ枯れは2018年に始まり、2020年から木を伐るなど具体的に里山管理をリスタートさせた。

具体的に農場で何をやっているかという取り組みについてお話する。褒めてもらった

が、木を伐るということが僕の日常である。本当に目新しいものや技術を見つけたわけではなく、ごく当たり前に向き合える人が向き合ったら、少し前進したという感じである。

ナラ枯れを契機に、もう一度里山を管理しようと考えていろいろ勉強した。その成果と、倉本さんが再びやる気になったことが重なり、昨年から社会人講座で「里山の未来を拓く」を始めた。参考までに、去年の講座の様子を最後にご紹介する。これは日常の農場の様子である。去年受講してくださった方もここに何人かいらっしゃって、楽しそうな様子をご覧いただけるであろう。もしこの話の続きが聞きたいとか、里山についてもっと知りたいという方は、今年も開講するので奮ってご応募されたい。新たに昔ながらの管理を行う雑木林のゾーンを設け、それ以外の場所ではさまざまな目的を持った使い方をしたいと考えて準備中である。今日のフォーラムで出会う人や新しいご縁が、新たな使い方や目的を見いだすことにつながればと思っている。

### 3. 多摩・三浦丘陵群の里山保全活動

吉武美保子（NPO 法人よこはま里山研究所理事、  
NPO 法人新治里山「わ」を広げる会事務局長、  
新治里山公園にいはる里山交流センター長）

「里山の未来を拓く」というテーマの中で「吉武さんは多摩丘陵的な広い話をしてほしい」と倉本さんから依頼されて、準備してきた。普段は横浜で公園管理や指定管理の仕事や、森づくりボランティアのコーディネートをしている。そのため、本来であれば2～3時間は話せる内容であるものの、今日は多摩丘陵全体をざっくりと皆さんに知っていただく程度のお話をする。

昨日の学会から参加している方は？ 今日このためだけに来た方は？ 黒川農場に初めて来た方は？ 今日は初めての方が多い。

改めて自己紹介をする。私は2つのNPO法人に所属している。一つは「よこはま里山



図4: 横浜市の活動団体



図5: 多摩丘陵のランドサットモザイク画像

研究所（NORA）」で、森づくりボランティアのコーディネートなどを担当している。もう一つは「新治里山公園里山交流センター」の指定管理を担っている。新治市民の森をご存じの方も多と思う。

さて、本題に入ろう。図7は倉本さんが作成されたものに行政区画を加えたものである。東京都と神奈川県境界が見える。多摩丘陵とは、図7のあたり一帯を指している。今日の登壇者の多くは北側に拠点があるものの、私がいるのは南の横浜側である。多摩丘陵の範囲は広く、最高地点は標高220m、低いところでは70m前後である。分水嶺として多摩川と境川を分ける尾根があり、地名の由来にも関わっている。多摩丘陵は学校名や校歌にも多く使われており、地域に根付いた言葉であることが分かる。さらに、行政区を越えて緑を守る取り組みがある。「多摩、三浦丘陵の水と緑に関する広域連携会議」などがあり、現在は「広域連携プラットフォーム」という形で活動が続いている。行政境界を越えて動物や鳥の目線に近い感覚で守っていくことが特徴である。私は横浜にいたので横浜の事例を紹介しよう。横浜には「みどり税」という1人あたり年900円の課税があり、緑の保全に使われている。その成果として、市民の森が15年で47か所に増えた。斜面地の管理や境界の調査、ボランティアへの支援も進んでいる。また、市民協働の団体は大小様々で、小さな公園の花壇を維持する団体から、70haを管理する団体まである。よこはま里山研究所も特別緑地保全地区を1つ任されている。都市の中に点在する緑地を、それぞれ市民団体が守っている状況である。里山保全は樹林地だけではなく、田んぼや畑、草地も含む。所有者が個人か企業か自治体かによって関わり方が異なる。農地の場合はほぼ個人所有であり、森林と関わる場合とは配慮すべき点が異なる。次に、三浦半島の事例に移る。横須賀市には「長坂緑地里山活動連絡会」があり、NPO法人三浦半島生物多様性保全が中心となっている。逗子市には「逗子里山の会」があり、葉山町にも里山系の団体が8つある。三浦市では小網代の谷が有名で、神奈川県の特産活動とも連携している。ただし三浦市では農業、漁業が盛んなため、市民ボランティア型の里山活動は少ない。神奈川県全体では「里山保全活用再生条例」に基づく活動がある。その多くは相模川以西に集中している。黒川地域も含まれているが、相模川の東西で里山の捉え方に大きな違いがある。東側の多摩丘陵では都市近郊型の里山保全、西側では中山間地域型の課題に直面している。多摩丘陵に住む私たちにとっては、共通した環境や課題があり、今後の議論の中で共有できればと思っている。

#### 4. 図師小野路歴史環境保全地域における里山管理と研究活動

山田 晋（東京農業大学、歴環研究者連絡会）

次は、東京農大の山田で、研究者連絡会で「こんなことをしています」という活動を報

告する。個別事例ということで、私からは黒川の裏側にある東京都町田市の図師小野路歴史環境保全地域での特徴的な活動を紹介します。我々研究者が関わり続けており、その事例を報告し、話題を提供する。

里山の活動は法令や関わる人の状況が様々なので、研究者として「結局何をしているのか」をお話しするには、まずその場所の特徴を説明しなければならない。話の3分の2ほどは場所や保全活動の特異性について述べ、最後に研究者連絡会の役割をお話しする。

横浜の例では、ボランティアが非常に盛んだということであった。図師小野路歴史環境保全地域では対照的な活動が行われている。地元農家が自ら地域を管理するというやり方である。最初から里山管理の技術を持った人たちが30年間活動を継続してきた。そこに我々研究者も加わっている。活動範囲は黒川の裏側に位置する35ヘクタールほどの地域で、東京都の歴史環境保全地域に1977年に指定されている。

この保全地域ができた経緯については、多摩地域は人口が多く自然が早く改変され都市化していった。その中で数少ない緑地を守ろうという動きから1970年代初めに小野路で7地区を保全地域に指定しようという計画が立ちあがった。この地域は中世の城跡を含み、歴史性が高いため「歴史環境保全地域」と位置付けられた。城跡は自然度の高い環境として人の手を加えず維持し、周辺の里山は人間の管理で保全、湿地部分は湿地環境として維持するという方針で指定された。

指定により私有地に規制がかかり、建築や伐採など無秩序な開発が防止された。相続が発生すると東京都が優先的に買い取り、私有地が公有地化されていった。しかし里山は人が管理してこそ維持される。所有者から離れ公有地になった時点で元の管理者による活動は止まってしまう。東京都は業者に委託したものの、田んぼ作りや雑木林の伝統的管理ではなく、緑は守られても結果として元の里山環境は荒廃していった。この問題を受けて地元農家による管理が1992年から始まった。町田歴環管理組合が設立され、理事長の田極公市さんら地元農家が中心となった。彼は代々土地を受け継ぎ農業を営んできたが、多摩丘陵の地形では農業が難しく、途中からバラ農家に転身した。彼は「地域指定によって農業の自由も制約されている」という矛盾を感じつつも、伝統的な知識と技術をもとに「地元農家自身が管理した方が自然を守れる」という考えを持ち、管理組合の発足に至った。

管理組合の活動は有償で、東京都の委託を受けて公有地を対象に行ってきた。組合員は伝統的な里山管理技術を有し、田んぼの畦作りや雑木林の管理を週2回ほど行っている。ボランティア型とは異なり、専門知識に基づく持続的な管理が特徴である。古くからの農作業技術を記録した資料を基盤に、自分たちの作業方法を東京都に提案し、それが正式に認められて活動が続けられている。我々研究者は2003年から「歴環研究者連絡会」を立ち上げ、情報共有や調整を行ってきた。個別に農家や行政に依頼するのではなく、研究者同士で連携を図り、調査データを東京都や管理組合に提供する。年1回の会合やメーリングリストでの情報交換を中心とし、必要に応じて科学的データを提示することで活動を支

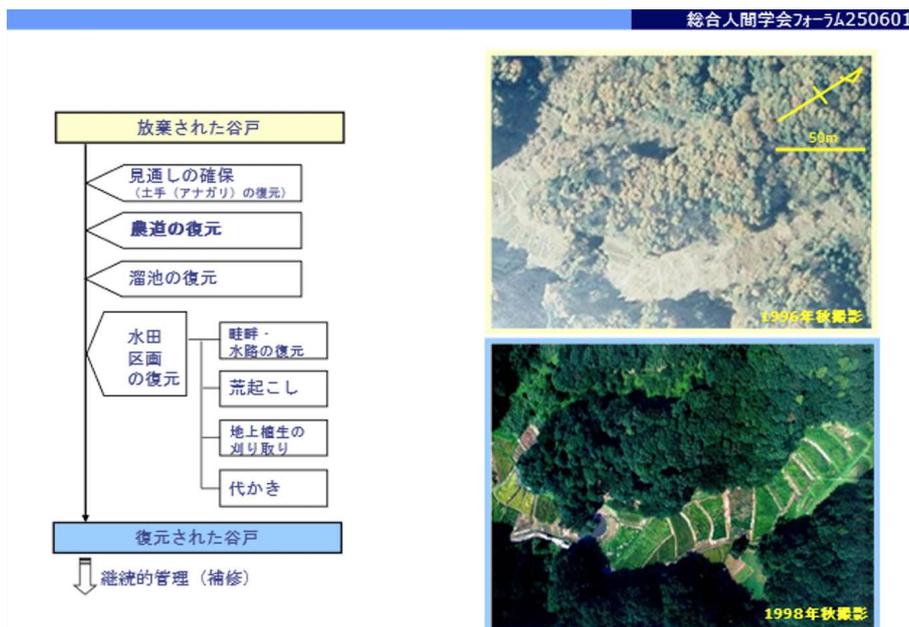


図 6: 谷戸の復元 左: 谷戸の作業手順/右: 復元前後の神明谷戸の航空写真

援している。当初は控えめにしていたが、現在は東京都や組合から提言を求められることも増えており、積極的な関与も行っている。現在、歴環研究者連絡会には複数の大学や独立研究者が参加し、学位論文 4 本、論文、学会発表も多数蓄積されている。地域にどれほど寄与しているか定量的には難しいものの、東京都環境局からは「他の緑地よりも研究者が継続的に入り、データを提供している」という点で特別に評価されていると感じている。私たちは調整役として、研究活動が地域活動を損なわないよう留意しながら支援を続けている。

## 5. 長池公園と里山保全活動

小林健人 (NPO フュージョン長池、長池公園園長)

私の非常に個人的なプロフィールの話をしたい。私は動植物オタクである。生き物や植物が物心ついた時からずっと好きで、好きなことばかりやって大人になった。今も、里山と言うと、生き物ありき、植物ありきで、そういう目線でどうしても見てしまう。今日もここへ来るまでの間、雑草を観察して来てしまうほど、誰から頼まれるわけでもなく植物のことばかり考えている、そういう人間である。

私は長池公園のある八王子市の中でも、多摩ニュータウンのど真ん中で育った。ニュータウン世代と言われている。それまで多摩丘陵の豊かな風景が広がっていたところを造成して、一気に街ができた。その街に入居してきた、まさにそういう家族の子供として入居してきた世代である。その頃から本当に生き物ばかり追いかけていた。ジレンマを抱えて

いた。というのは、緑をすべて崩して壊してできた街に自分は住んでいる。でも自然が好きで好きでたまらなくて未来に残したいし、大切にしたいという思いでいろんな活動しようとしている。そのためにずっと違和感があった。

平成狸合戦ぽんぽこ、人間が街を作って自分たちの居場所をなくそうとしているから戦おうじゃないかというタヌキと人間のバトルが繰り広げられるという映画があった。半分ノンフィクションみたいな映画であった。実は背景画も実際にある風景が出てきた。あここはスーパー三徳だと見ていると、知っている場所がいっぱい出た。その中で印象的だったのが、タヌキたちが「あ、町になってしまったな」と途方に暮れて涙してるシーンなどであり、そのシーンで見ている先にうちの実家が写っていた。

そのことから、私は「本当に自然のことを考えていいんだろうか」というジレンマを抱えていた。でも今は自信を持って、さまざまな活動を行っている。ニュータウンに住んでいたからこそできることがたくさんあると思って、この地域で引っ越すこともなく、タヌキたちと一緒に暮らしながら活動をさせてもらっている。そのようなことを片隅に入れて聞いていただいて、「おもしろい講演で、おもしろい人たちがいるのだ」としてもらえたらうれしい。

長池公園は里山の公園として知られている。この写真を見てわかるようにあまり里山感はない。入り口はこのように開放感があって芝生がある。人がいっぱい集まっており、毎週のように見られる光景である。八王子市立の公園であるにもかかわらず、年間で 20 万人以上の来園者がある、非常に賑わっている公園である。下では風船を浮かべて池の掃除をしていて、ちょっとおもしろい光景である。

公園の中に足を踏み入れてみると、少し懐かしいような田んぼの風景や薪を得るために守り育てられた雑木林が残っていたり、田んぼでお米作りをしていたりした頃にその水を温めるために作られたため池などがそのまま残されている。街の中にあるにもかかわらず、この公園の中に一步踏み入ると急に昔にタイムスリップしたような気持ちにさせられ



図 7: 形成してきた長池公園と地域の関係 (NPO フェージョン長池)

る空間である。

NPO フェージョン長池が2006年から継続して管理をしてきた。その中で大事にしていることをお話する。まず、これは空から見た公園の地図である。周りを入れた地図にすると、全部マンションになってしまう。公園の道を挟んだ向かい側は団地であり、公園だけがオアシスのように残されたという状況になる。街の中に残された公園である。谷があって、そこに水が流れていて、谷戸の地形が残されている。次に、残されたものはいわゆる里山の景観であるが、景色として残しただけではだめで、そこには常に人の出入りがあって、活動があって、にぎわいがあることによって里山が里山として機能を発揮し続ける。里山文化の継承と創造をテーマとして管理を行っている。最後に里山文化は広い。炭焼きや米作りであったり、そういうものもちろん里山文化であるものの、もっと身近なところで言えば、落ち葉を掻いて集めて肥料を作ったり、林の中で下草刈りを毎年やることも里山文化の一部である。その完全な継承していくことは無理である。公園になっているので、長池公園の里山の資源を使って生活をしている人はいない。長池公園に限らず、多摩ニュータウンの緑という緑がほぼすべて公園になっているので、もう誰かの持ち物である裏山ではなくなっている。したがって、公園では昔ながらの生活を再現して、この資源を使って暮らしていこうということは不可能である。

それではどうしたらいいか。「創造」という部分を私たちの立場で考えてアイデアを投げかけていく。周りに住んでいる人たちと一緒に創造していくことが求められると思われる。それについては後半でお話する。

園内には800種類以上の植物が自生していて、それが保全されている。非常に多い数字である。長池公園の面積は20ヘクタールであるものの、湧き水があって湿地があって、草原が創出されていて、雑木林が健全に保たれている。小さい中にも環境の多様性が残されていることで、非常に多くの種類の植物が残っている。

里山の保全では、例えば「ホタルがいる公園なのでホタルを守るために頑張って活動しましょう」とか、「オオタカが繁殖しているので、そのオオタカを守るために皆さん頑張りましょう」という、シンボリックな生き物に焦点を当てて、それを守るために活動を展開していくパターンが多いかもしれない。長池公園ではそのようなシンボリックなものは一切ない。むしろ「800種類以上の植物が自生していますよ」という、生態系ピラミッドで言う底辺の部分を常に豊かであるように整える。その上に生態系がどんどん成り立っていくことを目指している。時々「あ、オオタカが繁殖したね」というようにシンボルになるような生き物が現れてくれたりするものの、植物ありきのボトムアップ的な感じで管理を進めている。

そういったことをNPO主体で行っている。特徴としてはボランティアやイベントを充実させて、なるべく公園を利用する皆さんや周りに住んでる方々に気軽に関わってもらえる仕組みを整えてきた。里山の価値について述べよう。先ほど「暮らしのための里山では

もうなくなった」ので、何のために存在していて、どうして守っていかなければいけないのかということを確認に言えなければいけないと思って、考えてみた。1 つ目が「生物多様性の保全」である。里山を維持してきた頃は、特に生き物を守るために維持してきたというわけではないかもしれない。しかし、これからの時代には、里山にしかない生き物や里山にしかない生態系が存在する。そういうものを守っていくためには、里山を維持していくことが必然的に必要になってくる。2 つ目が「文化の継承」、3 つ目が「コミュニティの形成」である。昔の里山の良いところは、年齢や立場に関係なくご近所同士で里山に出て、一緒に野良仕事や山仕事をして助け合っていた。その中でおじいちゃんが子どもにいろいろ教えたりして、多世代交流があったのではないかと。むしろその部分を里山の価値のひとつとして捉えてもよいと考えている。4 つ目が「環境教育の場」である。今は学校教育も忙しく、カリキュラムに縛られていて、自然環境を使って体験していくことを先生方だけではやりきれない。そこを地域社会が支援していく。そのための場所として里山を活用していくことが最近では主流になっている。植物もたくさんあります。人の手入れが常にあることによって、写真に写ってるような植物は「ここは安心して生育できる場所だな」と認識して生えてきている。生き物も同じである。例えば最近撮ったクロホシタマムシの写真。鳥から両生類、昆虫に至るまで、里山ならではの生き物がたくさんいる。

ここで注目したいのは「なぜ里山にしかない生き物がいるのか」ということである。例えばカエル。皆さんご存知のアカガエル。卵は水の中で、おたまじゃくしも水の中で育ち、足が生えて上陸して大人になる。大人になった後のカエルって普段あまり見ない。実は水辺をかなり離れて、雑木林の中に入り込んで、笹の茂ったところで1年暮らしている。卵を産む時だけ水辺に来る。だから「カエルの保全をしましょう」となると、産卵場所を整備するのは大事であるものの、大人になってからの住処が必ず近くにないといけない。雑木林と田んぼやため池が隣接してセットでない生きていけない。

他の生き物も同じで、1つの環境だけでなく複数のタイプの環境を行き来したり、ライフステージの中で変えたりしながら生きている。だからそういうことを考えないと里山の生き物の多様性は守れない。ある意味で、そういう生き物たちが住んでいる里山は環境の多様性が良い状態に保たれていると言える。哺乳類もいることがある。そのような里山も人の手が入らなくなると、先ほど小泉さんからも話があった通り、ナラ枯れが起きたり、木が高く伸び続けて歳を取っていったりするので、あまり良い状態ではなくなる。笹がぼうぼうになって、他の植物がほとんどない、生物多様性に乏しい林になってしまう。

長池公園は公園である。公園の管理は園路や広場を草刈りしておけばお客さんが快適に過ごせる。しかし、里山を良い状態に維持していく使命を持っているので、それに加えて冬場に伐採や下草刈りをしている。力になっているのは地域の人たちである。これは小学生と一緒に落ち葉掻きをしている様子や、ボランティアの皆さんとスタッフが作業してい

るところである。長池公園に特徴的なのは「あらゆる作業を管理者以外の人と一緒に協力してやっている」ところである。今日もあてはまるが、毎日誰かが公園で手入れをしている状況を作り出している。その集大成が2019年で、江戸時代からあると言われている「長池」でかいぼりを行った。池の水を抜いて泥上げをして水質をきれいにしたり、外来種を駆除したりする目的である。この時も本当にいろんな方が協力してくださった。嬉しかったのが、写真の3つ、すなわちミズスギナ、ヒメミクリ、ジュンサイの花である。これらは東京都では絶滅種になっていたのだが、池の泥の中で種子の状態で生きていて、かいぼりをしたら一気に芽生えて花も咲いた。61年ぶりに復活を遂げたということである。このようなことを可能にするのは地域の力が大きい。別所町会など町内会まで一緒になって関わってくださったのが特徴的であった。

「ステークホルダー」という書き方をしたが、長池公園の近隣には学校がたくさんある。学校だけではなくて、保育園、幼稚園、それから町会、自治会など、いろいろな団体がそれぞれ活動している。それは里山の活動だけをしているわけではなく、それぞれの活動をしているだけなのだが、その中に「公園で何かをする」という提案を1つずつしていったら、全ての学校や団体と繋がれるのではないかと考えた。いろいろなことを提案してきた結果、今はここに書いてある団体はすべて何らかの形で毎年関わっている、そういう状況を作り出した。それは、公園を日常的に使うユーザー、あるいはゲストと呼ばれる人たちが、公園を良くする人たち、里山の魅力や価値を高める当事者になるという考え方のもとでやってきたものである。

具体的に例を紹介する。1つが「パークキッズレンジャー」である。これは私が大好きな活動で、地域に住む小学生とその家族を対象にしたボランティアである。生き物調査や池の掃除など、公園でやっている仕事を子供たちにもやってもらう。子供たちだけじゃなくて、その親御さんや兄弟など、みんな一緒に週末は公園で活動しよう、というボランティア制度である。小学生が100人以上登録していて、月に2回活動や情報交換をしている。子供をこれだけ味方につけておくと未来が明るい。私たちは子供に関わる活動をすごく積極的にやっているが、それがお金になるわけではなく、かなり投資的な部分が多い。ただ、20年後、30年後の街や公園を考えると、この子たちに今のうちに手厚く支援を行って、彼らの「ふるさとづくり」を頑張ることが、必ず未来の街を良くするだろうと考えて支援している。

子供ばかり鼻息しているわけではなく、それぞれの世代に合わせたいろんな受け皿を用意している。「ボランティア制度」として、里山保全隊や里山サポーターがある。ちょっと変わったところでは「旬の草木」。今見どころの花の名前を学んで覚えながら名札を設置していく。これはお客さん発信で「こういうことをやってみたい」という提案があったので、「じゃあやってみましょう」という形で制度化したものである。このように「やってみたい」という気持ちをどうやって公園で一緒に実現できるかを出発点にして、いろん

な制度を整えた。また「雇用の創出」もやっている。里山活動は立ち行かなくなるなどの、持続可能性が問題になりがちである。「仕事じゃないから」なのである。仕事として長く関わり続けられなければ難しい。そこで「生きがい就労」という呼び方をしているが、この方々は多摩ニュータウンに住んでいるけれど、毎日サラリーマンとして都内に通っていた人たちである。定年退職してリタイアすると、居場所がない。バリバリ働いていたけれど、地域のことはほとんど知らない。奥さんや子供たちは地域に根付いていても、お父さんは一番孤独である。そこを狙って積極的に雇用し、週に2回3回でいいから草刈りをやらないか。もちろん有償で、刈払機の安全講習も受けてもらっている。今は30人ぐらいいて、シフト制で草刈りを回している。障害者の福祉団体とも連携している。里山活動を直接担っているわけではないものの、里山の中でゴミ拾いや簡単な草刈りをしてもらい、基盤を支えてもらっている。

最後のスライドになる。「里山をどうしようか」「今後どうしたらいいか」ということではなく、この町がどうなっていくのか、この町をどうしていききたいのか。それが私たちが普段考えていることである。そのために里山の保全活動をうまく使えないか。そういう視点で、里山も良くなるし街も良くなるし、人もいろんな居場所を感じながら活動できる。そうしたら、この街の社会的課題の解決にも繋がるのではないか。

最近「NBS (Nature Based Solutions)」という言葉が流行っているが、まさに考え方は同じである。里山活動を地域を良くするための方法論として使えるのではないかと、最近思っている。具体的にはここに書いてある通りだが、ニュータウンといっても、もう20年、30年経っていて住民は高齢化している。シニア世代の雇用や健康促進に里山活動はとても貢献している。逆に少子化で子供が減っている中、子供たちがこの街で生き生きと活動できることは重要である。子育てとも相性が良く、貢献している。

ニュータウンができる前から住んでいた方々と、新住民の間にはいまだに隔りがある。そういうところも、里山活動を一緒にやることで少しずつ緩和されてきていると感じている。根はみんな一緒である。里山の未来を考えて、子供も好き。そこは同じである。吉武さんは同じことを違う地域で考えてやっていたんだなと思って驚いた。「地域の自然を地域みんなで作れば街になる」という話をまとめとしてお伝えした。

## 6. 多摩グリーンボランティアの紹介

田村 薫 (多摩グリーンボランティア森木会会長)

多摩グリーンボランティアの紹介から始めよう。実はここは多摩市とすぐ隣である。この門を出てから10分も歩けば、多摩市と川崎市の境がちょうど突き当たりの尾根である。尾根から向こうが多摩市である。ちょっと歩けばすぐに来ることができる。その多摩

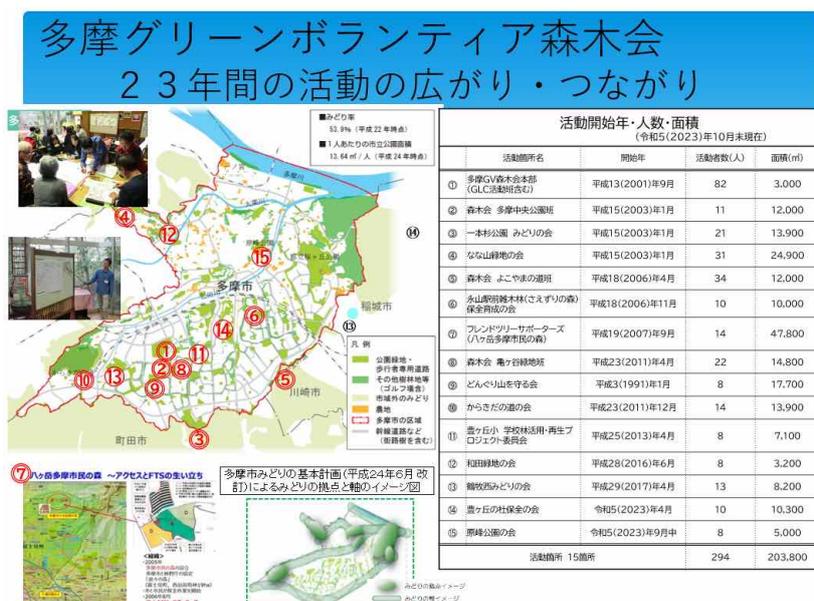


図8: 多摩グリーンボランティア親睦会の構成

市に、森木会という一般の市民が主に保全活動している会があって、14の団体で活動している。それを取りまとめているのが森木会である。

私の自己紹介に移ろう。私がこういった活動を始めたきっかけは10年前である。倉本さんの講演会があって、そこでたまたまチラシや案内を見て「どんなものだろう」と思って参加したのがきっかけである。主催していたのが森木会で、多摩市にグリーンライブセンターがあり、そこで活動していた。ここから10～15分ぐらいの場所にある会議室で講座を受けた。そこで森木会に入会して、会員になった。2023年からは森木会の会長ということで、設立当初からやっていた方から引き継いでいる。20年以上経ったので世代交代という形になった。私はふだん全く自然とは関係のない機械メーカーに勤めていて、主に輸出入を担当している。原体験は子供の頃の里山遊び（雑木林、田んぼ）である。私はここから15分ほどのところに住んでいる。親が引っ越してきた時に初めて多摩に来た。

その時はまだニュータウン団地が新しく、10年も経っていない団地ばかりで、子どももたくさんいた。遊ぶ時は団地の中の公園でも遊べたものの、たまたま裏に丘があり、丘を登ると団地が見渡せて、後ろを向くと林が広がっていた。林を抜けると野原や田畑が広がっているという、そういう光景の中で遊んでいた。本当はいけないのだが、用水路に入って魚を捕まえたり、カニを捕ったり、イモリやオタマジャクシを捕まえて家に持ち帰り、水槽に入れて飼っていた。とにかくサワガニがものすごくいた記憶がある。今は全部U字溝で固められて、全くいなくなってしまう。そういったことを泥だらけになっていたのが私の原体験である。

学生時代は高校、大学で山登りに夢中であった。山登りはちょっと危険で、ヘルメット

を持って、50m ぐらいの長いロープを担いで登山をしていた。その時に植物にも興味を持ち、いろいろ写真を撮ったりしていた。ただし、その時はその道に進もうとは思わず、大学も普通の文系であった。しばらく自然とは山登り以外では関わりがなかった。そうこうしているうちに結婚して家庭を持ち、山登りも行けなくなってしまった。子供が大きくなってきたら、もっぱらキャンプをしていた。けれどもしょっちゅう行けるわけでもなかった。そんな時にたまたま「そういえば裏山へ行ってみよう」と思い、行ってみたら、遠くに行かなくてもこんなに自然豊かなところがあるんだと改めて気づいた。それ以来、外で散歩したり、少しずつジョギングをしたりした。私は走るのが大好きなので、この山の中を走り回っていた。それが今につながっている。里山との出会いが長く続いているきっかけの一つになった。

多摩グリーンボランティア森木会の活動内容について説明する。創立は2001年10月であった。活動内容は、多摩市内の公園、緑地や雑木林の保全活動、それから緑の活動の仲間作りである。会員の構成は個人会員で、「グリーンボランティア講座」というのを設けており、緑に関心のある市民が多摩市広報などを見て応募してくる。そこで「里山の保全活動ってどんなものか」と思った人が1年間、1月から11月まで毎月1回、1日講座を受ける。そういった中で賛同していただいた方が個人会員となり、14の団体のどこかに参加して一緒に活動する。基本原則としては、主体性、自主性を持って自ら進んで行動することである。それぞれ14の団体は独自に活動している。また、社会性、連帯性ということで共に支え合い、学び合い、創造性を発揮し、先生を育成し、より良い地域社会を作ることを目指している。無償性、見返りを求めないということから全て無償で活動している。

ボランティアの始まりは1990年代で、公園や雑木林が荒れていたこと、市の財政も逼迫していたことが背景にある。その時、公園審議委員の中の3名が「このままではいけない、市民が立ち上がって自ら汗を流して無償で雑木林の保全管理をし、環境保全を図れないか」と考え、始まったのがきっかけである。1999年なので、もう26年になる。ただ3人だけではできないので、いろいろな既存の団体や一般市民に声をかけてメンバーを集めた。今では23年間で、去年から14団体になっている。市内には13の活動場所があり、1つの団体は多摩市の保養所がある長野県富士見町において「市民の森」という場所を管理している。そこは市内の小中学生が林間学校で訪れる場所で、子供たちの活動がやりやすいように木を伐ったり、林業体験のサポートをしたりしている。そうした団体を含めて全部で14団体になる。

この15団体をほぼ取りまとめているのが森木会で、横のつながりとして毎月1回、第3火曜日の夜6時から運営会議を行っている。各団体から代表が来て、Zoomでも参加できる。多摩市のグリーンライブセンターという環境拠点で会議をしている。その他に年1回、森木会全体としての総会や合同研修会も行っている。合同研修会では、道具の使い方

や環境問題の流れなどの研修をしている。昨年は倉本さんに来てもらい、市民活動の流れについての講座を受けた。また、安全管理担当者会議といって、各団体から安全担当者を集まってもらい、ヒヤリハットの共有や安全ガイドラインの作成、講習会や最新技術を学べる場を設けている。こういった活動は多摩市の環境部公園緑地課との共同事業として実施している。

講座については多摩市と森木会の共同で行っている。テキストは森木会のメンバーが講師となり、講師陣で作成している。専門性の高い講座は恵泉女学園大学の先生に依頼することもある。ともかく「考える前に実際に体を動かす」ことを重視し、行動してみても共に学び、理解を深めるようにしている。活動場所は公共の場であるため、各団体はメンバー間で合意形成を行い、管理目標や計画を作成している。団体が活動している場所で講座を行うことで、受講者が修了後に「どこで活動したらよいか」という参考にもなっている。

講座は初級、中級、上級に分かれている。初級講座は個人のための講座で、緑に関心を持った方が「里山とはどんなものか」「雑木林はどんなものか」を学ぶ内容である。年末の12月に入校式を行い、顔合わせをして、1月から11月まで月1回の講座を行う。最近猛暑のため8月は休みで、全10回の講座である。平成14年から始まり、昨年までで第22期、令和6年の時点で受講者は665人、そのうち475人が森木会に入会している。3回以上休むと修了できず、翌年に受けられなかった講座を受講して修了することになる。

具体的な講座内容を示そう。1月は伐倒体験のデモを行い、雑木林の説明をする。2月は実際に受講生がノコギリを使ってコナラやクヌギの木を切る。直径15センチぐらいの木を8人1班で力を合わせて伐採する。3月は伐った木を使ってシイタケの駒打ちをし、ドングリの苗を植える体験も行う。4月は雑木林の観察で、ちょうど花が咲く時期なので観察を行い、新緑の中で下草刈りを体験する。5月は新緑の季節に長池公園などへ見学に行き、他のグループや自治体での事例を学ぶ。6月は植物観察で、植物の名前を学び、外に出て観察する。7月は休講。8月は土壌生物の観察、顕微鏡を使って土の中の生物を観察する。午後からは市長を招いてのみどりについての意見交換会を行う。9月は竹林の整備と植生調査を行う。一定の区画を区切って草木や樹木の種類、空の見え方などを調査する。これらの調査は各団体の管理計画に役立つ。10月は腐葉土置き場づくりや腐葉土の天地返しをする。腐葉土を一度掘り返して上下をひっくり返す作業で、カブトムシの卵や幼虫など生き物の観察もできる。10月と11月には雑木林の保全育成計画の立案を行い、1年間のまとめとして「自分たちが保全育成するとしたらどうするか」をグループで話し合い、ワークショップ形式で発表する。これで1年間の講座が修了する。次に中級講座の説明をする。これは仲間のための講座で、草刈機の使い方、ファーストエイド、樹木剪定、チェーンソーの使い方などを半年かけて学ぶ。最後にはボランティアリーダーとしてのノウハウも学ぶ。2005年から始まり、昨年までで延べ283人が受講し、193人が修了している。上級講座は地域のための講座として検討中で、まだ実施されていない。

現在の課題は、活動者の高齢化と減少、それから講座を修了後に森木会に入会者して活動に参加してもらえ人の減少である。グリーンボランティア活動や運営の継承をどうしていくか、つまりスムーズな世代交代をどうやって実現するかということである。高齢化が進んでいるので難しいところではあるものの、どのように地域に広げていくかも課題になっている。さらに、行政とどのようにうまく連携していくかという点も重要である。いろいろと悩みながら活動しているところである。

## 7. 質問とまとめ

**倉本** 質問については皆さんに関係があるものを選び、それについて答えてもらう。活動への参加者を広げるためにどんな取り組み、工夫、考え方をしてきたか、教えてほしい。

**小泉** 参加者を広げるための工夫は、会によって「どういう人たちに何をやってほしいか」という点は違ってくる。私が関わっている、あるいはその周りにはいるボランティアの状況を見ると、何かのきっかけで関心を持った人たちを置き去りにしないことが大事である。せっかく来てくれたのに、その人を「何しに来たの？」というだけで何も相手にしないのはよくない。その人に「また来たい」と思ってもらえるように、ちゃんとお相手をする必要がある。お相手というのは、「この会はこういう魅力があるんだ」「こういうことをやっているんだ」ということをきちんと伝えることである。そうしないと、その人たちが「ここに自分の居場所がある」と思えない。それを伝えられることが大事なのではないかと感じている。

**山田** 私の研究者連絡会のこととすれば、活動への参加者を広げるために特別な仕組みがあるわけではない。関連して、ほかの都市と同じような環境保全活動の事例に置き換えるとすると、この事例は全国どこにでも当てはまるケースではない。地元で管理できる人たちが残っている場合のモデルケースだと東京都も言っているし、実際にそうなのだと思う。お話ししたとおり、そういう人たちがコアとしていて、その周りをサポートするボランティアの人たちがいる。この枠組みを維持していくことが重要であろう。現状では、ボランティアについては東京都環境局がコーディネートしているので、トップダウンになってしまうものの、そういう枠組みがあって実際に今動いている、ということが大事だと思う。

**小林** 長池公園の事例から、参加者を広めるためには「待たないこと」が大事である。参加者は勝手に来ると思って待っているのではなく、こちらからどんどん発信していくことである。地域に出て行って、一見関係なさそうに思える会合にも全部出て「こういう活動があります」と惜しみなく伝える。それぐらいしないと、参加者はなかなか集まらない。もう 1 つは、すごく大事だと思っていることであるが、「洗練されたことをしない」ということである。つまり「完璧で素晴らしい活動をしている」「とても綺麗な広告

を作っている」「こういうこともやれている」というふうに見せるのではなく、「公園管理者だけでは全然できていない」「里山のことは頑張っているけれど花壇は全然できていない」といった部分を隠さず、あえて見せたり愚痴をこぼしたりする。そうすることで地域の方が「あ、それなら自分にもできるかもしれない」と思い、自分が力になれると感じて一步を踏み出すきっかけになることが多かった。穴を見せることが大事である。次に、「公園でアライグマの足跡を見つけた」ということは農業生産物だけでなく、カワニナやサワガニといった生き物にも影響が出ているのではないかと、という指摘で、長池公園では影響は出ているのか、また対策をしているのか、という質問である。外来種の中でも特にアライグマは影響が強いと認識している。東京都内でアライグマがいない場所はほぼなく、最も深刻な影響を受けているのは両生類である。両生類の産卵場などに関してはアライグマ対策が必要である。長池公園でもアライグマの駆除をしたことがあるものの、非常にむずかしかった。動物の駆除は自前でやる場合も手続きが大変で、なかなかうまくいかない。自治体が本気になって取り組むべき問題だと考えている。もう1つの質問は「里山環境で生きる生き物の例」としてヤマアカガエルが出てきたが、他にどんな生き物がいるか、というものである。先ほどフクロウの写真が出てきたが、フクロウも里山環境に強く依存している。フクロウは、日中は鎮守の森、神社やお寺の森のように大木のあるところに棲んでいる。ただし餌場は別である。フクロウはアカネズミを食べるが、ノネズミがたくさんいる、見通しのいい草地のような場所で狩りをする。昼間は大木のある森で過ごし、夜は餌を取る環境に移動して、両方を行き来して生活しているわけである。フクロウには鎮守の森が必要であり、同時に草地がちゃんと管理されていること、往来できる環境が確保されていることが大事である。フクロウは里山を象徴する生き物だと思う。

**田村** 森木会では多摩市で行われるさまざまなお祭りやイベントに参加している。例えば「エコフェスタ」では、環境問題に関連した団体が参加するレストラン会場で展示を行い、活動を宣伝した。また、5月の連休に開かれる「子供まつり」では、雑木林で取れた木の実を使った工作づくりを企画したり、年末には「クリスマスリース作り」を実施したりしている。このように、自然に親しめるイベントに参加したり、独自に企画したりして活動している。また、ホームページもあり、そこを通じて新たに参加する人も増えてきている。参加者は自然に興味のある人が多く、多くの場合は里山保全や個人活動を行っている人、あるいは多摩市のグリーンボランティア経験者が加わっている。

**倉本** 1990年頃には私も人を集める立場にあった。当時、桜ヶ丘公園雑木林ボランティアは活動を始めた。活動を向上させ、参加者が楽しく、対等な関係で継続できるようにすることを大事にしてきた。「必要な時に必要な人が現れて活動に参加してくれる。そのおかげで、その時々ピンチを乗り越えてこれた」と聞いている。最初に仕組みを整えておき、必要な人が入ってきて、程よく活かせるような体制を作ることが要点であろう。私がこうした活動に関わっていたのはつまり35年ほど前のことである。今日はその年代

の方はほとんどおらず、若い小林さんや田村さんのような方々が参画されている。多摩丘陵の里山保全活動だけでなく、地域のさまざまなことを引っ張っていくのは若い世代だと思われる。若い方にこそ活躍していただきたいと思い、今回登壇をお願いした。その姿こそが里山の未来を切り開いていくことを示すものであろう。

**学会長挨拶（古沢広祐）** 学会大会のシリーズとして、二日目の今日は学会外から半分以上の方にご参加いただいた。昨日は、若手ワークショップと大会シンポジウムが行われたが、主に学会員が中心であった。この学会大会は2日間の日程で行われており、今回が第19回目である。今年度は来年20周年を迎える節目の年でもある。20年の歴史の中で、今回の大会テーマは「自然と人間の未来」という非常に大きなタイトルを掲げ、そのサブテーマとして「里山」に焦点をあてるとともに、今日のフォーラムでは「里山の未来を拓く」といった言葉をキーワードに据えた。学会としてこのようなテーマを正面に掲げるのは初めての試みである。昨日は生田キャンパスで議論中心の室内開催であったが、今日はフィールド体験も含んで実践活動をテーマにして行われた。未来を拓くために私たちがどう行動していくかを考える場として、学会にとっても挑戦的な会合になった。本日まで参加の方の過半は学会外の方なので、学会大会の趣旨を簡単に説明したい。お手元の学会のパンフレットをご覧くださいれば分かるが、さまざまなテーマを扱っている。21世紀に入ってから、同時多発テロや震災、災害、そして地球温暖化や生物多様性の危機といった問題が次々に起きている。こうした時代において「人間とは何か」という根本的な問いを、本学会としては改めて突きつけられている。近年は少子高齢化や人口減少といった課題が深刻化している。22世紀には日本の人口が大幅に減少する可能性すらある。そのような大きな時代変化の中で、人間と自然の関係を考える手がかりとして「里山」が重要な意味を持つのではないか。超高齢化社会、子どもたちの未来、不登校や学校への不適應といった課題に対し、人間社会の制度の外にある里山という存在が人間性を取り戻す場所となり得るかもしれない。自然を前にしたとき、私たちは初めて人間存在の小ささを認識する。世代を超えて関わる場としての里山は、未来を拓く手がかりを与えてくれる場所なのではなかろうか。昨日のシンポジウムでは、地球環境問題や人間が地球を破壊していく現状にも議論が及んだ。展望が開けない状況の中で、ウクライナやガザの問題のように世界の危機が同時に進行している。他方、日本社会が直面している人口減少の問題についても、アジアや地球全体の未来の縮図であり、いわば社会実験場ともいえそうである。そうした視点で考えると、「里山」というキーワードは単なる象徴ではなく、社会実践的な試みであって課題解決の苦労の中で未来への希望をつなぐものといえそうである。この希望は日本だけのものではなく、世界とも共有できるものである。近年、外国からの来訪者が増える中で、日本の伝統文化や人とのつながりに触れる場としても里山は大きな可能性を持っている。昨日や今日の午前の議論の中でも、コロナ以降の若い世代の不登校や自殺

といった深刻な問題に触れた話がかかり出た。こうした暗い側面もあるのだが、本大会の最後に「里山を通じて未来を拓く」という実践的展望について、参加者と共有ができたことは大きな意義があったと思う。明治大学の生田キャンパスと黒川農場を会場にして、大変有意義な大会を開催することができた。改めて開催校の皆様にお礼申し上げたい。

## おわりに

倉本 宣

私が小学校に入学した頃の3箇所の空中写真を比較してみよう。

雑木林は15～20年に一度皆伐されて、薪や炭に使われ、落ち葉は堆肥として使われてきた。小金井公園は、緑地となって20年が経過しているため、樹冠が大きくなっていた。1940年の「紀元2600年記念事業」で計画された小金井大緑地の後身である。現在は広大



図9: 小金井公園（上）、矢川緑地保全地域（中）、黒川農場周辺（下）の空中写真（1961年撮影国土地理院）

な雑木林の大部分を「バードサンクチュアリ」として野鳥の楽園にすると同時に雑木林の保護にも取り組んでいる。矢川緑地保全地域北側の斜面には小面積ながら雑木林があり、胸高直径は腕くらいで、使われていた時代の雑木林であった。黒川農場周辺は雑木林が皆伐されて、薪や炭に使用されていたので、群落高がふぞろいであり、更新からの時間が経っていない群落高の低い林分が見られた。雑木林は 1955 年頃まで使用されたと言われるので、70 年が経過した現在においては主木の大径木化が進行している。落ち葉かきはより最近まで続けられたものの、最近では放置された林床がほとんどである。

3 枚の写真は倉本が小学校 1 年生のときのものである。1955 年生まれの倉本は矢川緑地で使われていた時代の雑木林にたづねて触れることができた。倉本より若い方は使われていた時代の里山を知らないことであろう。いまでは大径木となった雑木林を更新のために伐採すると木がかわいそうだという苦情が多いという。本来の姿を知らないのだからしかたがないかもしれない。使われていた時代の里山に戻すことよりも現実的なことは、小林講演によって示されたように、都市に生きる我々の生活の中に里山を位置づけることであろう。新たな里山と人との関係をみつけて、里山を活用することを通じて本来の里山を取り戻すだけでなく、未来にふさわしい里山を共に作っていきたい。

[ くらもとのぼる / 明治大学 / フォーラムコーディネーター / [kura@meiji.ac.jp](mailto:kura@meiji.ac.jp) ]

## **Satoyama Forum: Promising Future for Satoyama of Northern Tama Hills**

KURAMOTO, Noboru

“Satoyama Forum” on the second day of the 19th Conference was held at Kurokawa Field Science Center, Meiji University. Focusing on satoyama in the northern Tama Hills that are primarily used for public purposes, reports were shared by coordinators involved in conservation and interpretation at these sites. The coordinators Kobayashi, Tamura, Yamada, and Koizumi are members of the younger generation and are likely to continue serving as satoyama coordinators for many years to come. Yoshitake, Iwasaki, and Kuramoto belong to a generation that has begun to consider handing the baton to the next generation. Common features among the presenters were their affection for the Tama Hills satoyama and their proactive, inventive approaches to activities. Although some express concern about the future of satoyama, the presence of such coordinators suggests a promising future for the satoyama of northern Tama Hills.

**keywords:** Conservation of Satoyama, Education of Satoyama, Tama Hills, Future of Satoyama



---

## あとがき

### Postscript

編集委員長 宮盛邦友  
MIYAMORI, Kunitomo

『総合人間学』(オンライン・ジャーナル)第19巻第2号をお送りします。本号は、2025年5・6月に明治大学(生田キャンパス、黒川農場)にて開催された研究大会および「里山フォーラム」の概要を掲載しています。

今後、本誌は各年度2回刊行し、第1号は投稿論文を、第2号は研究大会概要を中心とした構成とする予定であります。これまでのように年1回の刊行では、大会企画の報告・内容が翌年の大会直前になるという大きなタイムラグが生じ、大会に参加できなかった会員にとっては、「これまで」の報告を読むだけになっていました。このタイムラグを解消し、総合人間学の「これから」の研究の活性化のために早い段階で大会報告の概要や論文などの諸情報を提供することが年2回刊行の主眼です。

コロナ禍以降の間、総合人間学会は、オンラインでの大会・研究談話委員会が多く、会員が集まりワイワイ、ガヤガヤと総合人間学を深め掘り下げるといった機会が少なくなっていました。「あらゆる機会あらゆる場所」において、総合人間学が議論されることを願っての対応なのです。

編集委員会では、その一環として特集などの企画や書評・図書紹介の掲載も提案されています。会員のみなさんからの本誌のあり方に対する提案を積極的に受け付けますので、意見をお寄せ下さるようお願いします。

編集委員をはじめ多くの方々にお世話になり、刊行することができました。本当にありがとうございました。

[みやもりくにとも／学習院大学／教育学]

---

誌名 総合人間学（オンラインジャーナル）  
第19巻第2号（2026）  
Online Journal of Synthetic Anthropology  
Vol.19 No.2 (2026)

ISSN 2188-1243

発行日 2026年2月28日（第一版）

発行元 総合人間学会

連絡先 〒194-0204 東京都町田市常盤町3758  
桜美林大学 LA 学群 崇貞館 2F 教員ラウンジ気付  
熊坂元大 研究室

Website <http://synthetic-anthropology.org>

Mail [contact@synthetic-anthropology.org](mailto:contact@synthetic-anthropology.org)

---



**ONLINE JOURNAL OF SYNTHETIC ANTHROPOLOGY**  
**Contents**

**[Reports]**

Report on the 19th Research Conference of The Japan Association of Synthetic Anthlopology	1
The Japan Association of Synthetic Anthropology Secretariat	
Satoyama Forum:Promising Future for Satoyama of Northern Tama Hills .....	5
	KURAMOTO, Noboru
<b>Postscript</b> .....	29
	MIYAMORI, Kunitomo

---

Vol.19, No.2    February 2026

edited by

Japan Association of Synthetic Anthlopology